

The Inheritors論考 : 0a信仰の観点より

吉村, 治郎

<https://doi.org/10.15017/246>

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 23, pp.9-18, 1996-03. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan

バージョン :

権利関係 :



The Inheritors 論 考 — Oa 信仰の観点より —

吉 村 治 郎

A Study on *The Inheritors*

—— From the Viewpoint of the Belief in Oa ——

The Inheritors, published in 1955, is the second novel by William Golding. This novel, based on the historical facts of anthropology, depicts the two primitive peoples: the Neanderthals and Homosapiens. And its main story is about the process in which the latter people takes the place of the former one. The novel, however, is not an anthropological work, but a literary one loaded with his usual theme, that is, the matter of original sin.

As is often true of his novels, there are many factors in it too that bring about various kinds of interpretations. Among them, it is the Neanderthals' belief in Oa that is the most important. It seems to give a good clue to understanding the nature of the novel. So that, this paper first is designed to make clear the nature of the religion, and then to show the mental difference between the two peoples from the viewpoint of the religion, which, I believe, is the best way to understand the author's intention in the novel.

1

The Inheritors 『後継者たち』は William Golding の二番目の長編小説として 1955 年に出版された。これに先立つ 1954 年には彼の出世作となった *Lord of the Flies* 『蠅の王』が出版されている。この作の舞台は未来に設定されている。しかも場所は絶海の孤島。核戦争が勃発し、子供たちだけを乗せた飛行機が疎開の途中、南海の孤島に不時着する。子供たちだけが助かり、島での生活が始まる。最初は協力し合っていたが、やがて少年たちの間に亀裂が生じる。対立グループが形成され、両者の闘ぎ合いは遂に複数の犠牲者さえ出してしまう。子供たちの共同社会はさながら大人社会の縮図そのものと化す。子供とはいえ、そこには既に支配への渴望、権力欲、嫉妬、憎悪、敵愾心、そして狂暴性といった大人の持つありとあらゆる人間悪の萌芽が露呈される。

19世紀ロマン派の自然詩人ワーズワスは、子供を神の国からやってきた神々しい無垢なる存在として讃えた。彼にとって子供は神の国の栄光をまだ身にまとった存在であり、その無垢性は神の国の栄光の名残であった。これに比べれば、ゴールドディングの子供は全くの対極にある。彼はこのように、一般に無垢とされる子供の中にさえ既に原罪の存在を認めるのである。

続く第二作『後継者たち』では舞台は一変する。未来から一転して原始時代へと帰って行く。人類学上われわれ現代人の祖先とされるホモサピエンスが登場する時代が小説の舞台だ。そのホモサピエンスが先住民のネアンデルタール人を滅ぼし、これに取って代わる過程を描いた作品となっている。

創作にあたってゴールドディングは当時出ていた人類学書に可能な限り目を通し、その資料とした

ようである⁽¹⁾。むろん完成された作品は、あくまでも彼の思想を語る文学書である。猿人ネアンデルタール人の絶滅とホモサピエンスへの交代という一連の歴史的事実を踏まえながらも、作品はやはり原罪という、作者の揺るぎない一貫した思想で貫かれている。つまり『蠅の王』において未来の子供を通して追求した原罪の問題を、作者は続く『後継者たち』では一転して目を遙か原始の過去に転じ、人類の起源にまで遡って再度見凝め直しているのである。小論では作中に描かれたネアンデルタール人の宗教に着目して、二つの民族の分析を行う。そして作品にこめられた作者の意図と思想の一端に触れて見たい。

2

この小説の一つの特徴として語りの視点の変化が挙げられる。小説は全部で12章から成っているが、第1章から第11章の後半まではLokというネアンデルタール人の目と意識を通して描かれている。そして第11章の終わり近くでLokの視点は放棄され、代わって、Tuamiというホモサピエンスの一人物の目と意識を通して物語りが進行して行く。分量的に言えばLokの視点からの叙述が大半を占めているが、視点の交代は二つの民族の本質を描く上で大きな効果をあげている。Lokの目と意識を通して語られる叙述を通して読者はLokに代表されるネアンデルタール人の本質を内側から知ることができる。そして同時にLokの目を通して読者はホモサピエンスの本質を外側から眺めることになる。一方、視点がTuamiに移っても同じである。今度は読者はTuamiの視点からネアンデルタール人を外側から、そしてホモサピエンスを内側から知るのである。視点の交代はこうして二つの異民族の本質を内と外の両面から描き分ける効果を上げている。また、小説の大半がネアンデルタール人の視点からのものとなっているので、読者はややもすれば、ネアンデルタール人に同情的になり勝ちになる。とりわけホモサピエンスに滅ぼされる民族であってみれば、読者の同情は一層ネアンデルタール人に傾く。しかし、視点の交代はそれを阻止し、読者に両民族に対する客観的

中立的態度を要請する役割を果たす。

しかし、いずれにしても、こうした技法の目的は両民族を対等かつ客観的に描くことにより両民族を比較対照させて相互の本質をより一層鮮明にしようとする所にあるのであって、民族の滅亡と交代という物語の事件性にあるのではない。従って、二つの民族の本質を分析することにより作品にこめられた作者の意図が明らかになると思われる。まず最初にネアンデルタール人の特徴から検討していこう。

ネアンデルタール人はホモサピエンスと比べて知的レベルはそう高くはないが、独特の宗教を持っていることが明らかにされている。それはOa信仰という形で表現されている。この宗教はネアンデルタール人の精神はもちろん一切の行為行動を規定する根本原理となっている。それではOa信仰とはどのようなものであろうか。第2章で一族の長老Malは家族を前にして天地の始まりについて次のように述べている。

There was great Oa. She[Oa] brought forth the earth from her belly. She gave suck. The earth brought forth woman and the woman brought forth the first man out of her belly.⁽²⁾

天地開闢を物語るこの条りはネアンデルタール人のいわば創世記といってよいが、ここではOaが万物の生々流転、即ち、生と死と再生を司る創造の女神であることが明らかにされている。彼等が自分を取りまく自然に対して畏敬の念を示すのはこうしたOa信仰の下に生きているからである。つまり彼等にとって草であれ木であれ、天から地に至るまで、万物の諸相は尽く創造主Oaの創造物であり、神聖なる霊の宿るものであるからだ。作品に漲るanimismはOa信仰の必然的結果といえる。ではOa信仰の例を具体的に検討し、ネアンデルタール人の本質を見てみよう。

彼等の畏敬の対象は木や草といった生命あるものばかりではない。水や石などの生命を持たないものまでもその対象となる。特に水に対する畏敬は相当なもので、時として、それは悲鳴を伴った恐怖に変わることさえある。従って彼等はホモサピエンスとは異なり水の中を泳ぐことはもちろ

ん、その中に足を浸すことさえ憚る。もしするとすれば死ぬほどの恐怖を覚悟せねばならない。従って、水を飲む時とか、儀式用として水を使う必要な時以外は水を極力避けようとする。水に対するこうした恐怖の念は小説の始まりから早々と表現されている。たとえば、次のようなエピソードがある。

海辺の住居で厳しい冬を過ごした一族は木々に新緑が芽吹く早春の頃、食料豊富な山へと帰ってくる。その帰途、沼に渡しておいた丸木の橋が何者かに持ち去られていた。長老の Mal は知恵をしばらくようやく新しい丸木を沼に渡すことを思いつく。一同は順次その丸木橋を渡るのだが、水に対する恐怖心の余り丸木を渡るのは命がけの試みとなる。最後に渡った Mal は足をすべらせ水中に転落する。幸い生命に別状はなく助かるが、この恐怖の体験はその後、彼の死の原因となる程である。

水に対する畏怖はさらに、水の凝固した氷にまで向けられる。彼等は氷を “ice woman” (27) 「氷女」として信仰の対象とし、Mal の病氣平癒を祈願して「氷女」に肉の貢物を捧げる。

水に対するこのような畏怖の念はこの場面だけに限らない。作者は小説全編に渡ってことあるごとに繰返している。Oa に対する彼等の信仰の強さ絶対性を暗示するとともに、水はネアンデルタール人とホモサピエンスそれぞれの存在のあり方を否応なく分ける、文字通り分水嶺の象徴となっている。異民族のホモサピエンスがいとも簡単に水を渡り、利用することを考えれば、作者が水にこめた象徴的意味は容易に理解されるであろう。

さらに Oa の影響は火の扱い方にも見られる。山のいつもの台地に帰った彼等はまず最初に火を起こす儀式を行う。祭司は Lok の母であり、長老 Mal の妻でもある “the old woman” が務める。所定の準備の後、火をおこすのであるが、彼等は「火がおこる」とはいわない。“The fire is awake again.” (30) という。「火が再び目を覚ました」という擬人的表現から、火は単なる道具としての物理的火ではなく、霊の宿る、人格をもった神聖な火として捉えられていることがわかる。

動物に対しても同様である。ネアンデルタール

人は、まれに甲虫などを食べる他は、木や草の若芽、球根類及び菌類を主食とする菜食主義者である。動物の肉は食べなくてはならないがホモサピエンスのように自ら殺生を犯してまで肉を求めたりはしない。ライオンなど他の動物が殺した肉に限って、しかもやむにやまれぬ飢えに悩む時にのみ肉を口ににする。

一族の調達係として食物を探しに出かけた Fa と Lok の二人は偶然ライオンの餌食となった牝鹿を発見する。その時、彼等は思う。

A cat has sucked all her blood. There is no blame. (53)

殺生を忌避するネアンデルタール人は、殺したのはライオンであり自分たちではない。自分たちは罪がないといい聞かせて、鹿の肉をとる後めたさをまぎらそうとする。解体作業に入っても後ろめたい気持ちは決して消えることはない。彼等は再び次のように言いながら作業を続ける。

This is very bad. Oa brought the doe out of the belly. (54)

ここでも獲物の牝鹿は Oa の創造物だとする意識が働いている。Oa による神聖なる創造物を解体することは、たとえライオンによって殺された死肉であるとはいえ、それはある意味では Oa を切り裂くことに他ならない。しかも牡鹿ではなく、女神 Oa と同じ性の牝鹿であることも一層罪の意識を高める。牝鹿は Oa に一層近いからだ。

次にネアンデルタール人の死生観を見てみよう。一族の長老 Mal の最期の場面はこの部族の死生観がはっきりあらわれている。Mal は先述の通り、山への帰途、丸木橋から水中へ転落した人物であるが、その恐怖体験が災いして徐々に体力が低下していく。家族の者は彼等なりに精一杯励ます。Lok が罪の意識に苛まれながらやっとの思いで持ち帰った牝鹿の肉もスープにして与えられる。しかし、その甲斐もなく Mal は逝ってしまう。代々のならわしに従い、温かい炉床の近くに墓穴が掘られ Mal の亡骸は地に帰る。その時 “the old woman” はいう。“Oa has taken Mal into her belly.” (91) 「オアはマルを胎内に引き取った」という表現の裏には当然「マルはオアの胎内から生まれ

た」という前提があつてのことである。彼等は Oa の創造物として生まれ Oa の創造物として自然に帰っていくのである。

以上見てきたようにネアンデルタール人の生活は一つの例外もなく、生と死と再生を支配する女神 Oa の信仰に基づいたものとなっている。時としてこの信仰は Mal を犠牲にするようなこともあるが、この死とて Oa 信仰と有機的な関連を持った死であつて、決して救いのない孤独な死ではない。

このように、自他共に Oa の創造物と信じて一木一草に神聖なる生命の存在を認め、これを畏敬するネアンデルタール人は精神肉体両方とも自然や宇宙の営みと一体となった生活を送っているのである。その意味では、Oa 信仰に生きるネアンデルタール人は万物の生成と破壊を司る宇宙の根源的意志 “Universal God”⁽⁴⁾ と固く繋っているといえる。彼等のいう Oa は、その働きの点において、万物を支配する根源的意志 “Universal God” に近い存在だからである。

次に彼等の家族関係を見てみよう。一族の首長は年齢的にも一番上にある Mal がなっている。しかし、彼はホモサピエンスの首長 Marlan とは大いに異なる。Marlan が絶対君主として他の者に君臨しているのに対して Mal は専制君主の面影は全くない。確かに Lok をはじめとする家族に命令を下したり助言を与えたりはする。しかし彼は単に一族のまとめ役にしかすぎず、他の者に対して支配者として臨んでいるのではない。彼は家族の中にあつて男性としての任務遂行の責任者の地位にあるだけである。彼等はよく、“A man for pictures. A woman for Oa.” (95) という。「男は絵を持つ」のが仕事であり、「女は女神 Oa に仕える」のが任務である。「絵を持つ」とはホモサピエンス流に言えば、「思考する」、または「判断する」という知的活動に近い。しかし、知能的にはまだ夜明け前にあるにしかすぎないので、それは純粋な「思考」や「理解」とはなり得ていない。多分に「感覚的な思考」や「理解」をいう。が、ともかく、このことから、一族では男女の仕事は分担制になっていることがわかる。しかし男性が優位にたっている訳ではない。ましてや男性が女性を単なる付属物

とするようなことはない。男女は平等の地位を持っているが、Oa の祭司を務める身である女性は男性の目には時として近寄り難い威厳をもつ程で、どちらかといえば、女性の方が権威を持っている。これは彼等の宗教が “matriarchal religion”⁽⁴⁾ であるからである。先に見たように、彼等が信仰の対象とする神は男性の神ではなく、万物の生と死と再生を司る女神であつた。しかも、この女神から最初に生まれたのは男性ではなく、女性であり、この女性から男性が生まれたのであつて、その宗教は「産む性」である女性優位の宗教だからである。しかし女性が女神 Oa の分身として権威を持つとはいへ、女性が男性の支配者として臨んでいるのではない。ネアンデルタール人の社会では、男女は支配と被支配の関係にないばかりか、男性間においても女性間においてもそれは見られない。従つて階級制度らしきものも存在しない、それゆえに支配権をめぐる争いも対立もなく、敵愾心も全くない。ネアンデルタール人の敵意と警戒心のなさは Lok の行動を見れば明らかである。

彼は生まれて始めて目にするホモサピエンスにひきつけられ木の繁みから彼等を観察する。その時一本の矢が対岸の島から飛んでくる。それはホモサピエンスが Lok を狙って放った殺意の矢であつたのだが、争いのない平和な世界の住人である Lok は武器というものを知らないで、その矢がなんであるのか分からない。矢が「小枝」に見えるばかりか、それを相手からの「贈り物」とさえ思ってしまう。

He looked towards the island, saw the bushes move, then one of the twigs came twirling across the river and vanished beyond him in the forest. He had a confused idea that someone was trying to give him a present. He would have smiled across at the bone-faced man ... (111)

Lok をはじめとするネアンデルタール人にはこうした異常ともいえる無邪気さが見られる。しかし、作者は彼等を知能の劣った愚かな存在と見なしているのではない。作者が行った Bile との対話を見ればそれは明らかである。

I picture the Neandertals as a primitive but good race

that existed before the Fall, wiped out by Homo Sapiens simply because it wasn't evil enough to survive.⁽⁵⁾

ネアンデルタール人の知能は、Lokに見られる通り、そう高くはない。数段下にあると断言している位である。しかし作者はとるに足りない下等な部族として否定しているのではない。武器も知らず、何の敵意をも持ち得ない愛すべき民族として肯定しているのである。この愛すべき善なる性格ゆえに、高度な知能をもつが、それだけに凶暴なホモサピエンスの手にかかっていとも簡単に滅ぼされてしまうのである。しかしネアンデルタール人はホモサピエンスの持ち得ぬ無垢の心の持ち主なのである。無垢を喪失し、墮落と汚辱の淵に身を沈めているホモサピエンスの後裔の一人としてゴールドディングは遠い人類の先祖が失くした無垢と善なる心への郷愁の思いを託してネアンデルタール人を描いていることは、上の言説からも明らかである。

Malが水に落ち、寒さと恐怖で身震いしている時、LokもFaもNilも一族揃ってMalに身体を押しつけて暖めてやる優しさはこの無垢なる善の心より滲みでる純粹かつ濁りのない愛の発露といえる。また山への帰途、先頭をきって急な崖を攀じるMalが足をふらつかせる時、一同も同じ方向にふらつくのも老体をいたわる優しい気持ちの表現に他ならず、高度な知能のホモサピエンスの目から見れば児童に類する滑稽なその仕草も無垢なる魂の自然な発現なのである。

とはいえネアンデルタール人はホモサピエンスになる可能性が全くない訳ではない。ホモサピエンスの臭跡を追って走るときLokは自分を“Lok-other”(77)、即ち「別人ロク」と感じたり、Faと共に樹上からホモサピエンスの生活の一部始終を目にする時“there were two Loks, outside and inside.”(141)と感じたり、“I am one of New people[Homosapiens].”(204)とも感じたりするのはそのあらわれといえる。

Oa信仰の下、生と死と再生という自然の営みの円環に従って生きているLokとはいえ、ホモサピエンスに出会う時、一時的ではあるが、その円環

を逸脱しそうになる。そしてその時、もう一人の自分の存在に気付く。つまり、かつて経験したことのない自我の分裂をLokは経験しているのである。しかし、その時同時に彼は仲間との絆が断たれるような恐怖を感じる。

ネアンデルタール人には自我分裂の萌芽が見られる。しかし、それはあくまでも萌芽の状態にあるのみであって、それ以上の前進はない。彼等はホモサピエンスに類似することはあっても、それはあくまでも類似であって決して同一となり得ない。一方は水を畏怖し、他方は交通の手段として利用するという、水に対する両民族の態度の違いにそれは表わされている。そしてまた、その事実は二つの民族の歩行姿勢の違いにも見てとれる。両民族は共に二本足歩行をするとはいえ、ネアンデルタール人は前傾姿勢をとる。構造的に四本足歩行も可能なのである。一方、直立二本足歩行のホモサピエンスは四本足歩行ができなくはないにしてもそれを行うには不自然な構造になっている。また両者の本質的相違は身体の色の違いによっても表わされている。ネアンデルタール人はホモサピエンスのTuamiの目には“red creature”(216)と映る通り、女神Oaの創造した大地に近い色をしている。一方ホモサピエンスの白い肌は大地とは相容れない。こうした両民族の対照的相違は両民族が似て非なる存在であることを暗示する、作者側の工夫といえよう。

3

一方、ホモサピエンスはどのように捉えられているのであろうか。それはネアンデルタール人との相違によって示されている。そこで、まず、ここでは水に対する両民族の態度の違いをさらに詳しく見てみることにする。

ネアンデルタール人は水を畏怖し近寄り難さを感じていたのに対して、ホモサピエンスは畏れるどころか、却って水を道具視して交通の手段とすることは既に前章で述べた。では、なぜネアンデルタール人はそれほど水を畏れるのか。彼等の信仰からすれば、水に限らず万物は女神Oaの創造物としておしなべて畏敬の対象となる筈である。そ

の中でとりわけ水に対して恐怖にも似た最大の畏怖を抱くのは何故か。これは彼等の信仰神 Oa の性格と密接に関わっている。

首長 Mal によって語られる彼等の創世記によると、Oa は万物の母であった。Oa から大地が生まれ、大地から女が生まれ、そして最後に女から男が生まれた。この神話の特徴は創造主が女性であることと、「女が男を生む」点からわかる通り、女と男は母と子で関係で捉えられていることである。つまり、彼等の宗教は「生む性」である女性が優位にたつ宗教である。そして、「生む性」とはすべての生命の母であり始源である。そして、それと同様、水もすべての生命の誕生の源であり糧である。生命の源、母、という点で水は、女性同様、万物創造の女神 Oa に一番近い存在である。従ってネアンデルタール人にとって水は女神 Oa の化身といっても過言ではない。Lok が母親の “the old woman” や、若い女 Fa の中に女神 Oa を感じるように、Lok をはじめとするネアンデルタール人が水に Oa の存在を直感するのはそのためである。そしてまた水は生命を与える母であると共に生命を奪う存在でもある。従って、ネアンデルタール人は水を神聖視して畏敬を払うと同時に恐怖をも抱くのである。こうした観点からすれば、水や氷、とりわけ水が具体的形をとった氷は女神 Oa の御神体そのものといえる。それゆえに彼等は水と氷に対して最大の畏敬と恐怖を捧げるのである。ところがホモサピエンスは水を水としてしか見ない。Oa の化身たる神聖にして恐ろしき水もホモサピエンスにとってはどのような信仰的意味も持ち得ない。この事実は何を意味するのであろうか。この点はホモサピエンスの本質を考える上で決して見逃してはならない。上で見た通り、作中で水は単なる物理的水ではなく、象徴性を帯びた水として提出されているからである。水に対する態度はネアンデルタール人の場合と同様ホモサピエンスの場合もその本質と深くかかわっている。いうまでもなく水の否定は Oa 信仰の放棄を意味する。ではその放棄はホモサピエンスの本質とどのようなかわりがあるのであろうか。この点を明らかにするには、Oa に基く世界観をもう一度思い出す

必要がある。

ネアンデルタール人は女神 Oa の信仰の下、生と死と再生という自然の営みに調和して生きていた。彼等の生命は Oa からの授かりものであったし、その死は母なる女神 Oa の胎内への回帰であった。来る所も帰る所もその所在が明確な死生観といえる。もちろんネアンデルタール人の死生観は理知によるそれではない。理知よりも直感や本能の方が遥かに豊かなネアンデルタール人はそうした大自然の流れを本能的に直覚し、一点の疑念のない宿命として素直に受け容れているのである。

生と死と再生を繰り返す自然のこうした流れに自己放下することによってネアンデルタール人は無垢と善を享受し、争いのない素朴で平和な生活を保証されている。女神 Oa への濁りのない帰依と畏敬と感謝が物心両面でのやすらぎをもたらすのである。それは畏敬の対象を持つものにのみ与えられる恩寵とっていいであろう。こうした観点から見れば、Oa 信仰の放棄の意味は明らかである。ホモサピエンスは Oa 信仰に見られる自然崇拜の世界から一步踏み出して、別の世界、別の次元で生きている存在なのである。作者は Lok に次のように言わせている。

“Oa doesn't bring them[Homo sapiens] out of her belly.” (173)

ホモサピエンスはもちろん Oa の申し子ではないばかりか、女神 Oa を抹殺し Oa の世界から離脱した存在なのである。こうした離脱を可能にしているのはいうまでもなく、彼等の持つ高度な知能である。高度な知能の一機能である理知の働きは迷信から迷いを消すごとく、ネアンデルタール人の神聖なる水から神話性を奪い去り、ただの水へと変貌させる。そしてただの水は恐れるに足りないものとなる。同様、ネアンデルタール人の Oa の世界はただの野蛮な原始の世界と化す。

高度な知能は確かにホモサピエンスに力を与える。彼らはそれによって丸木を削り抜いて舟に仕立てることもできれば、武器を作ることもしる。いずれも知能発達の前段階にあるネアンデルタール人には思いもつかないことである。

しかし、高度な知能は両刃の剣ともいえる。ホ

モサピエンスはそれによって Oa の世界から立ち上がり新たな水平線へと歩み出す。そして、ネアンデルタール人にみられる神話的束縛から自らを解放して自由意志を享受することができるが、反面、それは無垢と善の故郷である自然という樂園から自らを追放することを意味する。そして、それはまた女神 Oa に象徴される畏敬の対象を喪失することでもある。ネアンデルタール人は Oa という畏敬の対象を持つことによって、Oa を頂点とした統一と秩序ある世界が保たれ、その中で争いのない平和を享受していた。従ってホモサピエンスが絶対的な畏敬の対象を喪失することは平和と統一を欠いた無秩序の世界へと自らを投げ入れることに他ならない。

では神を抹殺した結果、畏敬の対象を持たぬ存在となったホモサピエンスはどのような人間関係を結んでいるのであろうか。

ホモサピエンスの社会の特徴の一つは、男性優位の “patriarchal”⁽⁶⁾ な社会になっていることである。ネアンデルタール人の社会では首長 Mal は男性であったが絶対権力者ではなかった。男女も平等であった。これに対し、ホモサピエンスの社会は専制的な長老 Marlan を首長とする、支配と被支配に基いた階級社会となっている。とはいえ首長の支配権は決して安定的なものではなく、絶えず力の強い者へ移る惧れを秘めている。支配者は自らの権力に安住することは許されない。Tuami の例が示すように、第二の力を持つ者が、虎視眈々と上を窺っている。彼は機会あらば、首長を倒して取って代わろうと、ひそかに象牙の剣を研いでいる。彼らの社会は実力本位の弱肉強食の原理が支配する社会でもある。従ってネアンデルタール人の社会に見られる、いたわりや連帯のある温かい繋がりはもはや存在しない。そこには支配権をめぐる絶え間ない闘争があり、野心野望、憎悪反目、そして敵意と怨念があるばかりである。

ホモサピエンスのこうした性向は単に個人的性格の問題とは限らない。絶対的畏敬の対象を持たないホモサピエンスの存在のあり方自体と深くかかわる問題なのである。Oa の神を否定し、畏敬の対象、即ち絶対神を持たぬホモサピエンスには、

不遜にも自らが世界の秩序となり神となろうとする本能的衝動がはたらくのである。己が支配権の確立をめぐる争いが胚胎する所以である。従って、ホモサピエンスを観察していた Lok はいう。“They are like Oa.” (195)。神を否定し、自らが神にならんとするホモサピエンスは Lok の目には女神 Oa と対抗する不遜な存在と映るのである。

ホモサピエンスが不遜にして不敵な暗黒の衝動を先験的に胚胎しているとする原罪的な人間観は別の形でも明らかにされている。それは両民族の歩行方法の違いの中に象徴的に暗示されている。

先にも述べた通り、二つの民族は共に二本足歩行をするが、ネアンデルタール人のそれは不完全なものであって、猿人特有の前傾姿勢による歩行である。そして必要に応じて両手を大地につけて四本足歩行を行う。しかも、それは不自然なものではなく、構造的に無理のない自然な行動である。つまり彼等は大地から完全に立ちあがった存在ではないのである。これはネアンデルタール人が、生と死と再生を司る女神の信仰に生きていることと無縁ではない。従って、逆にいえば、大地から両手を離して完全に立ち上がることは、とりもおさず大地の女神の否定と、それからの離脱を意味する。しかし、それは少なくとも Lok のようなネアンデルタール人にとっては自殺行為と映る。従って、完全に両手を大地から離し、前傾ではなく直立二本足歩行を習性とするホモサピエンスは Lok の目には大地の女神を否定し死の世界をさまよう不吉な民族と見えるのである。ホモサピエンスの直立二本足歩行を目撃した Lok はいう，“They walked upright and should be dead.” (143)。しかし、Lok の驚きはそれだけにとどまらない。彼は続けて次のように直感する。

It[walking upright] was as though something that Lok could not see were supporting them, holding up their heads, thrusting them slowly and irresistibly forward. (143-4)

ホモサピエンスの直立二本足歩行には、何か知ら得体の知れない暗黒の力の支配が感じられるのである。彼等が「抗し難く前へ前へと駆り立てられる」のは、Lok はもちろん、彼等さえそれと気付

かぬ暗黒の衝動が働いているからである。ここでは、この暗黒の衝動は、単にホモサピエンスの個人の性格によるものではなく、ホモサピエンスをホモサピエンスたらしめている直立二本足歩行そのものに起因する構造的、体質的衝動として捉えられている。先に見た、ホモサピエンスの特徴的傾向である支配への渴望、敵愾心、好戦性、不遜不敬、等々はいずれも彼等の直立二本足歩行からくる構造的な暗黒の力の具体的発現といえる。作者は、こうした暗黒の衝動の支配の中に、ホモサピエンスの、ひいてはその後裔たる現代人の宿命的原罪性を見ているのである。“Man is born to sin. Set him free, and he will be a sinner,”⁽⁷⁾と述べる彼にとって、人間とは存在そのものが罪悪なのである。

4

それでは悪への志向を求めてやまないホモサピエンスに救いはないのであろうか。この問題を考える時、小説の最終章は一つの示唆を与えてくれる。

首長 Mal の死を契機として、Ha, Nil, the old woman, Liku, そして Fa と相次いでネアンデルタール人は“new people”, 即ちホモサピエンスに滅ぼされていく。大人の中で最後に残った Lok も森をつんざく轟音によってその死が暗示されている。氷河期の終わりを告げるその轟音は溶解した氷河が大洪水となって森と山々を呑み込む音である。氷が女神 Oa の御神体であったことは先に述べた。その氷の支配する氷河期が今や崩壊の時を迎えている。しかもネアンデルタール人の絶滅と時を同じくして。氷河期の終焉はとりもなおさず女神 Oa の信仰時代の終わりを告げているのである。女神 Oa の信仰によって生きてきたネアンデルタール人 Lok は氷河の崩壊と運命を共にせざるを得ないのである。

ネアンデルタール人の最後を物語るこの最終章はホモサピエンスの動向も同時に伝えている。舟を作る能力を持つ彼等は洪水の森を逃れて遙かな水平線をめざして川へと舟を漕ぎ出して行くが、舟に逃れた“new people”, 即ちホモサピエンスたちにまじってネアンデルタール人のただ一人の

生き残りの赤子“new one”の姿が見られる。一緒にさらわれた仲間の Liku は既に食人種“new people”の食料となっていた。“new one”のみがホモサピエンスの女性 Vivani の意向で生き延びていたのである。Vivani は、半ば珍しいものに対する好奇心から、半ば亡くした児の代理の気持ちから“new one”の面倒を見ていたのであった。“new one”は彼等にとって好奇の的だった。Vivani の乳房にしがみついた“new one”を見て、彼等は無邪気なその仕草に思わず笑いを誘われるが、同時に、その生き物の異様な醜悪さに戦慄を覚える。この場面は決して“new one”の明るい未来を予告するものではない。むしろ不安な未来を思わせるが、作者の思い入れのこもった場面であることは疑いない。特にネアンデルタール人が無垢の存在であること、そして“new people”が無垢を喪失した流浪の民である事を考える時、“new one”はホモサピエンスが不安な未来を孕みながらも“new people”と共に未来へ向って舟出するこの場面は実に象徴的である。“new one”とは“new people”が直立二本足歩行と高度な知能ゆえに喪失した「無垢」への回帰の可能性を約束する存在なのである。“new one”と“new people”が共に“new”という共通語をもって呼ばれているのも決して偶然ではない。“new people”は“new one”と異民族の関係にあるとはいえ、“new one”的なものを受容する資質を内に秘めていることを暗示している。

ところで、この作品は“The Inheritors”, 即ち「後継者たち」というタイトルがつけられている。“The Inheritors”がホモサピエンスをさすことは作品を読めばわかるのだが、どのような意味をこめて作者はこれをタイトルとしたのであろうか。もちろんネアンデルタール人亡き後、世界を引き継ぐ民族という意味もあるであろう。しかしそれだけではない。これにはもっと深い意味がこめられている。先程とりあげた“new one”と“new people”の内的関係からもわかる通り、“The Inheritors”「後継者たち」とは「無垢」を「後継」する「者たち」の意味でもあるのである⁽⁸⁾。

5

小論ではネアンデルタール人の Oa 信仰の観点から二つの民族の本質を論じてきたが、ここで少し距離をおいて巨視的な目で作品を眺めて見ると、この小説は一つの聖書の寓話の世界を形成していることに気付く。

ネアンデルタール人とホモサピエンスは最初、共に氷河時代に暮らしていた。そして、その氷河時代とは既に見たように女神 Oa の支配する無垢の世界を象徴していた。ネアンデルタール人はその無垢の楽園の生粋の住人であった。彼等は最後までこの世界と共にあり、この世界を離れて生きていくことはできない。その氷河期の終わりはまたネアンデルタール人の終焉を意味した。一方、ホモサピエンスはこの無垢の世界にありつつも、既に内奥には無垢を否定する性向が胚胎していた。直立二本足歩行と高度な知能という表裏一体の関係をなす二つの生来の能力がそれである。その能力のおかげで、ホモサピエンスは様々な点でネアンデルタール人に優越できた。氷河期の終わりを告げる大洪水から身を守ることができたのも彼等が丸木を削り抜いて舟を作る優れた能力を備えていたからだ。しかし、その能力は彼等から無垢を奪い、無垢の楽園から彼等を追放せずにはおかない能力でもあった。かくして氷河時代の終焉と共にホモサピエンスは、ネアンデルタール人の故郷であり、無垢の故郷たる森と訣別して神なき世界へと舟を漕ぎ出すのである。無垢の森はもはや彼等の住処とはなり得ないのだ。

このようにこの小説はホモサピエンスの楽園喪失の物語として読むことができる。つまり聖書に見られるアダムとイヴの楽園喪失の神話と同じ構造が認められるのである。その意味で、人類の起源にまで遡って無垢とその喪失を描いたこの小説は、ゴールディング版の「失楽園」と見なしてよ

いであろう。

Notes

- (1) Biles, Jack I., *Talk : Conversations with William Golding* (New York : Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1970) 106 .,
- (2) Golding, William, *The Inheritors* (1958 ; London : Faber and Faber, 1981) 35 ., (以後本書からの引用は引用末尾のかっこ内に頁数のみ示す)
- (3) Friedman, Lawrence S., *William Golding* (New York : Continuum Publishing Company, 1993) 152 .,
- (4) Friedman, *William Golding*, 39 .
- (5) Biles, *Talk*, 106 .
- (6) Friedman, *William Golding*, 39 .
- (7) Biles, *Talk*, 105 .
- (8) この場面の解釈においては福岡女子大学吉田徹夫教授の示唆による所が大きい。記して感謝申し上げる。

Works Consulted

- Johnston, Arnold, *Of Earth and Darkness*
(Columbia : University of Missouri Press, 1980)
- Kinkead-Weeks, Mark, and Ian Gregor, *William Golding : A Critical Study*, (1967 ; London : Faber and Faber, 1985)
- Redpath, Philip, *William Golding : A Structural Reading of his Fiction* (Exeter : A. Wheaton & Co. Ltd., 1986)
- Tiger, Virginia, *William Golding : The Dark Fields of Discovery* (1974 ; London : Marion Boyars Publishers Ltd., 1976)
- 坂本公延, 『現代の黙示録』 (東京 : 研究社, 1983)